

Title	倫理学専攻のこれまでとこれから
Sub Title	On the hitherto-and-fro of ethics as a major field
Author	西村, 義人(Nishimura, Yoshihito) 小泉, 仰(Koizumi, Takashi) 池上, 明哉(Ikegami, Haruya) 小松, 光彦(Komatsu, Mitsuhiro) 樽井, 正義(Tarui, Masayoshi) 谷, 寿美(Tani, Sumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.33- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I 座談会
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

西 村 義 人

小 泉 仰

池 上 明 誠

小 松 光 彦

樽 井 正 義

谷 寿 美 (発言順)

**西村** 小泉先生のご存じの範囲で、かつて倫理学専攻で教えておられた先生方のことをお話いただければと思います。

**小泉** 倫理学専攻に私が入りましたのは 1946 年ですが、その時の先生方は、橋本孝先生と宮崎友愛先生のお二人だけでした。三雲夏生さんはまだ学生で、その翌年助手になり、またその翌年フランスに留学されたので、三雲さんとお付き合いするようになったのは、留学から帰って来られてからです。

まず最初に橋本孝先生のことをご紹介したいと思います。先生と宮崎先生を教えられたのは川合貞一先生で、この方は大正時代から昭和の初期にかけて、論争家としても非常に優れた論争をなさって、『明治哲学史年表』などにも御名前が出ています。残念ながら私は直接に習わなかつたので、そのお人柄については、橋本・宮崎両先生から間接的にお聞きしただけで省略させていただきます。

橋本先生がお辞めになる時に、「私は鉄砲を持ったことがない、サーベルしか持ったことがない」と言われたことを覚えています。お若い方には分かりにくいかかもしれません、学校教練というのがあります。学生も小隊長、中隊長となるとサーベルを持って、あとはみんなペイペイが鉄砲

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

を持つというわけです。この橋本先生は普通部の時代から、サーベルしか持ったことがない、(笑)自分で鉄砲を持ったことがないと、そういうふうに自慢しておられたんです。実際に大学の教師になられてからも、いつでもサーベルを持っておいででした。文学部長、常任理事、評議員をずっととなさって、図書館情報学科もおつくりになった。本当にサーベルの方であったと私は思っています。

ですから私にとっては雲の上のような存在でした。非常に厳しい方だったというのが私の時代の橋本先生の風貌です。塾監局の上の階にあった、旧一とか旧二と呼ばれていた教室で、倫理学演習を持っておられました。学生は私以外にあと二人いたかと思うのですが、私一人という場合が非常に多かったんです。朝の九時から始まりますが、ある時バスが遅れて、確かに三分くらい遅刻してしまいました。大急ぎで駆け足で上って行きますと、先生が上から降りて来られて、「今日はやめとこう」とおっしゃってサッサと行かれた。それ以後私は遅れたことがない。先生は身をもって示す教訓的な人物でした。

授業で私がマックス・シェーラーなどの独文を翻訳しますと、何にもおっしゃっていただけない。おっしゃっていただけない中で今でも記憶しておりますのは「Macht 権力」という言葉の意味を尋ねられたことです。私はその実例というのは目の前にいる先生だと思った次第でした。

何しろ余り質問なさらない。どっしりと壇上に座られて、私が翻訳をずっと続けていくのをじっと見られていたという、そういう授業でしたね。

西村 その頃学生の数は、どのくらいでしたでしょうか。

小泉 三年間上級生も下級生もいなくて、私たち三人だけでした。だから三学年で三人という状態です。哲学専攻は当時十一人いました。

西村 橋本先生には池上先生も学んでおられると思うのですが。

池上 私が学部、大学院におりましたのは、1953年から62年にかけてで、学部時代に橋本先生はちょうど常任理事をなさっていて、授業は持つ

ておられませんでした。人から、学内外での大変な実力者でごわい方であると聞かされており、私も大学院に入った時には、そういう印象を持っておりましたが、実際に接してみると、六十歳近くになっておられたせいもあってか、温厚な方という印象でした。一緒に授業を取っていたのは二人ぐらいしかおりませんでしたので、たまには喫茶店に誘われて茶飲み話をするといった雰囲気でした。それに大変世話好きでした。個人的なことになりますが、私は余り生活的に楽ではなかったもので、大学院当時アルバイトで図書館の嘱託をやっていたのですが、それは橋本先生のお世話によるものでした。デンマークに留学された大谷愛人さんの後任でしたが、大谷さんも橋本先生に御紹介いただいたそうです。

学問的な面では、大学院での授業はマックス・シェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』の講読と、それからやはりシェーラーの人格主義に関する講義でした。先生がドイツのフライブルク大学に留学されたのは 1926 年から 28 年にかけてで、シェーラーのこの主著の第三版やハイデッガーの『存在と時間』が出たのは 1927 年です。つまり第一次大戦以後の新しい傾向が顕著に現れ始めた画期的な時期に行かれて、帰国後マックス・シェーラーについての研究を著わされたということは、その方面の草分け的な研究をされていたんだと思うのです。

**西村** 私は橋本先生のお名前よりも、「カボネ」というお名前のほうを先に伺ったのですが。(笑)

**小泉** 確かに似てましたからね。

**池上** 普通部の主任時代に、そう呼ばれるようになったようですね。

**西村** 池上先生の頃は、学生数は何人でしたでしょうか。

**池上** だれが哲学でだれが倫理学だったか判然としないんですが、フランス語の原典講読を三雲先生に教えていただいた時は、五人ぐらいでした。ドイツ語のほうはややそれよりも多いかと思いますが、倫理学専攻は一学年五人ぐらいでした。私の学生時代を通じてそういう状態でした。

**西村** 当時の学生の気質は、何か今と違いましたでしょうか。

**池上** 私の前後の年度には体育会の人が多くて、みんな気のいい連中でしたが、特に倫理学をやろうというわけではなかったです。

**西村** 小松先生は橋本先生の思い出は何かございますでしょうか。

**小松** 私が倫理学専攻に入ったのは 1961 年ですが、宮崎先生を中心になっておられて、橋本先生はやはり雲の上の人という感じで、近代の倫理学史を担当されておいででした。直接お目にかかるより前に、先ほど紹介されました「カポネ」という名前を耳にしてまして、特に宮崎先生からよく話を伺ってましたので、三年のとき初めて橋本先生の授業に出席させていただきましたときに、その名前がぴったりだと感動した覚えがあります。  
(笑) 大学院の授業は、ご自宅でなさってまして、多井一雄君とお宅に伺って、カントの『実践理性批判』を読んでいただきました。午後二時から四時ぐらいまで授業を受けまして、その後相撲のテレビ放送がある時には、それを非常に楽しみにしておられて、もう直き相撲が始まるから見ていきなさい、と引き止められて、よくお付き合いいたしました。時には夕飯までご馳走になって帰るという、そういう楽しい思い出があります。

**西村** 正規の授業をお宅でなさるというのは、ちょっと今では考えられませんね。樽井さんも、橋本先生にならわれましたか。

**樽井** 私の橋本先生との出会いは大変印象的でした。三年生の時、1968 年でしたが、文学部では学生のストライキが行われ、それが終わって久しぶりに出ると、今日は君から話を聞きたいからと、その日は休講になりました。学生運動をしていた私から、どうということを考えているのか聞きたいとおっしゃるのでした。話をしたのはその時が初めてです。通された研究室には、学生運動に関する文献が幾冊もありました。その時に先生は七十歳を超えていたと思うのですが、そのお年で、二十前後の学生の考えていることに大きな関心を持つておられるというのは、素晴らしいことだと思いました。これは後からほかの方に伺ったのですが、先生は運動をしているご自分の

専攻の学生のことをとても心配なさって、その方にしばしば電話で様子をお聞きになってらしたとのことです。先生の電話はいつも早朝だったので、その方にはご迷惑だったでしょうが、私は思い出すたびにありがたく思っています。

西村 次に宮崎先生を紹介していただけますか。

小泉 宮崎友愛先生はお名前そのままに、非常に風貌の優しい、そしてまた親しみやすい方でした。当時助教授で、四十代前半でしたが、日本山岳会員として非常に有名な方で、あちらこちらの山に登った経験をいろいろお話していただいたことを覚えております。宮崎先生にはずっと親しくさせていただきました。

小松 わたしが宮崎先生に初めてお会いしたのは一年の終わりでした。進級する専攻を決めかねて、どういう経路だったのかはっきりしたことは覚えてないのですが、ともかく研究室に先生をお訪ねして話を伺ったことがあるんです。本当は倫理学は第三候補だったのですが、三十分か一時間ぐらいお話しているうちに、倫理学にしようと決めてしまったわけです。

今から考えると、お話の内容よりも、やはり宮崎先生のお人柄というか、そういうものがとっても強い印象として残ったようです。一見して非常に謹厳な印象を受けましたが、一旦話をされて心を開かれると、非常に優しい面が感じられ、そのコントラストといいますか、それがとっても印象的でした。

授業は、当時は今のような研究会というのがなくて、演習という形式でした。その演習では古典的なテキストを読み、先生のお話とか、学生のディスカッションとか、そういう形で進められるのですが、非常に印象的だったのは、テキストを非常に大切にされるということです。絶えず話をしているのは先生と学生なんですけれども、何かいつもその場の中心にはテキストがあって、それを中心にして動いてるという感じがありまして、それがとても新鮮に思われました。

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

われわれは今の学生のように勤勉ではなかったくせに生意気で、いろいろと絶えず独断的な自己主張ばかりしていたのですが、それを先生は黙つていつも聞いてくださって、頭からそれを撥ね付けるようなことはされず、黙ってテキストの箇所を指摘されたり、それと関連のあることを話題にされたりしました。われわれは後で非常に恥じ入り、それが強く印象に残っています。

それからそのテキストを読んでいく場合にも、真面目な者は予習していて、翻訳をするわけですけれども、通常の意味での翻訳をした後で、先生は思いもかけないようなテキストの読みを示されるんですね。そうすると全く違った意味がそこに見えてくる。古典的なテキストというのはそういうふうに、いわばちょうどプリズムとスペクトルとの関係みたいなもので、光の当て方によっていろんな色合いというものが読み取れるんだという驚き、感動、そういうものが演習の授業を通して教えられて、それがその後の私自身の進んだ方向というものを決めてくれたような気がします。

**樽井** 私が学部におりましたときは、宮崎先生は学部長になられたためにお忙しくて、いろいろお話するようになったのは、大学院に行ってからです。大学では西欧の倫理学を教えることがご自分の仕事であると強く自己規定されておいででしたが、年と共に老莊の思想に惹かれるようになられたというお話をいろいろな折りに伺っておりました。そこで、来年は定年を迎えるという年に、先生ご自身が今お考えになっておられることを是非お伺いしたいとこちらからお願いして、老子の思想について、大学院で一年間講義をしていただきました。

それから、山のことですが、私も当時はよく登っていたので、山を続けたいなら大学の教師になりなさいと先生に言われたことがあります。現実には、就職したらほとんど行けなくなりましたが。

**西村** 宮崎先生について、小泉先生にもう少しお話していただけますか。

**小泉** 宮崎先生は学部長をなさったほかは専攻の中にずっとおいでにな

ったので、恐らく接した方たちは一番親しく宮崎先生のことを思い起こされるだらうと思います。私もそうとして、戦後間もなくのまだ日本が独立していない時期に、宮崎先生にお会いしたのが、私としては非常によかったですと思います。カントをまず徹底的に宮崎先生から習いました。

正月などよくいらっしゃい、いらっしゃいというわけで、お宅へお伺いしました。奥様もとても気さくな方ですので、ご一緒にいろいろなお話をした。小松君もそうでしょう。家族ぐるみでお付き合いしたような、そんな気がしているんですね。非常にペーチャルな側面が強いんですが、君は結婚するのは待ち給えよ、私が世話をするからなんて言われたんですけど、こればっかりはどうもうまくまいりませんでしたけれどね。(笑) 非常に親しくしていただいたことを覚えています。今も奥様のほうはお元気でいらっしゃるんで、私も時々お便りなど差し上げているんです。

宮崎先生は小平の新宿というところに住んでおられました。田舎田舎した武蔵野の雰囲気を非常に漂わせたところで、お邸に古い神社の門と鳥居がありました。あの方の家は宮司ですが、ご自身はしておられなかった。先生も血筋から老荘思想に非常に共鳴を持たれたのでしょう。本当にそういう雰囲気ですね。ある方が、先生は風のような存在だと言ってましたけど、確かに春風みたいなところがありました。

小松君が習った時に思いも付かない視点からテキストについて指摘なさったというお話を聞いたんですが、私は私の頭が悪かったせいだと思うけれど、先生の説明をいろいろ聞いてもよくわからんのですよ、正直言って、もう一つはっきり言ってくれないかなと、いつでも思ってましたけどね。(笑)

**池上** 割合そういう点では控え目な方だったと思います。幾つになられても恥じらいみたいなものをお持ちで、それがとっても好感持てました。

**小泉** 橋本先生ははっきり言うのでよくわかる。マックス・シェーラーの論文で、橋本先生の論文と宮崎先生の論文読むと、やっぱり橋本先生の

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

ほうがわかりやすいでしょう、非常にクリアに書かれてますね。宮崎先生のは表現が難しいんですよ、非常に難しい言葉を使われるし、老莊的な霧がかかったようなところがありました。(笑)

**小松** 本当に言いたいことというのは表現できないんだというような、そういう意味のことをよく言われましたね。ですからご自分で西欧の哲学をなさっているんですけども、いつも最後に物足りなさを感じるという印象は、時々漏らしておられました。

**小泉** 東洋哲学をなすったほうが良かったかもしれませんね。

**西村** 池上先生は宮崎先生の思い出はございますか。

**池上** 私が学部、大学院生だった時代というのは、倫理学と名の付く授業というのはほとんど宮崎先生だったんです。その意味では授業面では一番接触の多かった先生です。

授業はカントが多かったわけですが、同時にマックス・シェーラーについてもちろんお話になる。しかしそれだけでなく、当時としては新知識であるヤスパーが度々話に出ました。授業の導入部的なことは現代の精神状況から話をされるんで、その意味では現代に対する関心から出発しました私などには入りやすい授業だったんです。

授業の内容もさることながら、宮崎先生の授業というのは話上手といいますか、個人的な談話でもそうですけど、非常に聞かせる授業だったです。授業の調子というのは年齢によって変わりますから、もっとお若い頃日吉で何百人と教えていられた頃の授業というのは、私が聞いた頃とはまた違ったものかとも思います。それから私から後になると、例えば先程話に出了老子などを語られるその語り口というのは違うかと思うのですが、私が教えていただいた頃は五十になるかならないかという頃で、非常に弁舌爽やかで、しかしおそらく若い時の調子とは違った、一番油の乗り切った時期だったと思うのです。

個人的にも、原典講読で接する機会がなかったということもあって、一

人でよく小平のお宅に訪ねて行きました、私が自分で読書してあれこれ勝手に吹きまくる議論を聞いてくださって、同時にいろんな文献の指示をしてくださいました。しかし同時にまた、ほかの方々も同様だと思うのですが、非常に座談のうまいかたで、山登りの話ですとか、昔日吉で倅監をやっておられた頃の人たちが、その後どうなったかとか、あるいは学内のいろんなことを、すごく長時間話してくださいました。印象としては、恐らく多くの方がそういう印象を持たれたと思うのですが、映画俳優の笠智衆に似てまして、五十前後にして枯淡の域に達しているという、そういう感じが強かったです。だからそれだけ落ち着いて話のできる方でした。

**小泉** ちょっと付け加えますと、商学部の事件がありましたね入試の問題で。あの事件を先生が病院の中で聞かれて、そして本当に涙を流されて慶應について悲憤慷慨されたんです。慶應は正しくなければいかんという、この信念というものを一生持つておられたなど、後でわかりましたね。個人的に接触する間は非常に柔らかくて、人柄が魅力的で、近くにすがりたいという気持ちにさせるんですけど、ご自分自身は一つのコンフィデンスを持っておられて、そして大変な慶應ナショナリストだった。これは本当に印象深いことでしたね。

**池上** 学生時代に接してた時にも大学の話をなさることが多くて、その時に愛校心というものを強く感じました。昔の方はどうなたもそうだったんじゃないでしょうか。昔の人たちのような愛校心は、私たち辺りから少し薄くなっていると思うのですが。

**小泉** その点では橋本先生も同じだったと思いますよ。面と向かってはおっしゃいませんでしたが、やっぱり大変な愛塾精神というのを持ってらして、それには感服します。私はどちらかというとちょっと路傍の石のほうだから、(笑) 初めから客観的にいつでも見てるのですが、生え抜きというのは、本当に僕は素晴らしいことだと思いますね。

**小松** それから宮崎先生は、大学卒業後朝日新聞社に入られたそうです。

倫理学専攻のこれまでとこれから

そうしたら川合先生が、辞めて助手になれというので助手になったと言わ  
れてました。私はどっちが良かったかわかりませんが。(笑)

それから当時は川合先生というのはうるさくって、ご自分はあちこち書  
かれるのですが、宮崎先生が『中央公論』に論文を書かれたら、川合先生  
に怒鳴られた。若い時代にそんなもの書くものじゃないって。もっと論文  
をしっかり書きなさいということで、それ以来よそのものに書かないよう  
な習慣になってしまったとこぼされていましたね。川合先生ってうるさい  
方だったらしいですよ。でも宮崎先生は後で、君達はよその雑誌にどんど  
ん書きなさいと、盛んに勧めてました。

**池上** 余り評論的なものは書くなということなんですね。専攻に入って  
最初に研究室にご挨拶に伺った時に、私は宮崎先生に言われました。いろ  
いろな雑誌名を挙げられて、そこに書いてあることを受け売りするよう  
なことをするな、というようなことを。だからそういう学者の気風というの  
があるのかなと思いました。昔の学者はやっぱりそういうジャーナリスト  
イックなものに書くというのを、すごく嫌う風潮があったんですね。

**小泉** 川合先生は違うんですよ。(笑) ジャーナリストイックにどんど  
ん書いてるんですよ。だから、若い時代にはちゃんと専門的なものに集中  
してやれ、ということだったんだろうと思うのです。(笑)

**小松** 今から考えると宮崎先生というのは、とっても記憶力のいい方だ  
ったと思います。若い頃の日吉の舎監時代も、その後も、毎週学生を集め  
て研究会をなさった。そういう時の一人一人の学生の名前はもとより、い  
ろんなエピソードをよく覚えてらして、そういう話をよくしてくださいま  
した。つい昨日のことのようにお話されるんです。そういう時は非常に生  
き生きして、一番楽しそうでしたね。

**小泉** お辞めになる時に、自分が予科教員だった時と、文学部教員にな  
ってからとを比べると、文学部へ来てからは自分としてはあまり楽しく  
なかったと言われました。それは君が今言ったように、それまでの思い出

がとても良かったのでしょうね。

小松 ともかく若い人と話をするのがとても好きな方でしたね、やっぱりそれだけ愛情深かったのだと思います。名(友愛)は体を表すと言いますが、やっぱり。(笑)

小泉 あのジェネレーションの方々というのは、そういう戦前の慶應を代表しているような側面があったわけですが、やっぱり戦後というのは社会の大変動があり、私もその中に巻き込まれているわけですが、やはり非常に孤立型の人間に変質してきますね、皆が。ですから学問的には鋭くなつたということはあるかもしれないけれど、人間的な意味において欠けたところも持ってきてるんじゃないかなと、自分でも反省するんですが。

それともう一つ、三雲さんからとその前の宮崎さんまでの間には、確然たる相違があります。ソシアル・ステータスが違うんですよ。橋本さんにしろ宮崎さんにしろ、地主の出身です。だから経済的には非常に安定してるわけです。三雲さん以降はそうじゃない。(笑) これは慶應の場合に特にそうだと思いますが、私立大学一般に言えることであるかもしれません。社会的身分が地滑り的に低い方に変わってきてる。

池上 戦争の影響ですね。戦前は中流程度の暮らしだった人が、終戦直後は極貧の生活を強いられましたからね。

小泉 三雲さんもよく言ってました。われわれからプチブルになってきた、非常に小市民的になったと。

西村 それでは三雲先生を御紹介いただけますか。

池上 三雲夏生先生は、1949年に慶應の文学部哲学専攻を卒業されて、1950年から53年にかけてフランスのリヨン大学、パリ大学に留学されております。そして1969年から73年にかけて常任理事をされ、さらには1975年から85年にかけて文学部長をされるというように要職を歴任されていたわけですが、私が初めてお目にかかったのは1953年にフランス留学から帰られた直後でした。私はその年の暮れに倫理学専攻に入ることを

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

心に決めましたもので、当時舍監をしておられた日吉の寄宿舎にお訪ねしたのが、最初にお目にかかった時です。

以後、学部、大学院を通じて常に教えていただいたわけです。学部当時は三雲先生はまだ助手をしておられて、授業では専ら原典講読だけで接しておりましたが、別の機会に個人的にフランス語の哲学書と一緒に読んでいただいたりしました。あるいは当時新婚早々で中目黒にお住まいでしたが、そこへ伺ってお話を聞いたりしていたわけです。

もともと先生はベルクソンとかブロンデルとか、フランスのスピリチュアリズム系統に関心を持っておられたというように伺っておりますが、留学された第二次大戦直後というのは、フランスの思想界が活況を呈してゐる時でして、特にカトリック思想においてはムーニエが指導しましたペルソナリズムの運動というのが起きていた時で、その影響を強く受け帰つて来られました。

ムーニエのペルソナリズムといいますと、スピリチュアリズム全体がそうだと思うのですが、心身合一体としての人間というものを重視します。それに社会的な実践性を加えて、戦後の二大思想潮流であった実存主義とマルクス主義の間に橋渡しするというか、それを総合するという、そういう傾向であったわけです。当時私はキルケゴー尔とかサルトルとか、こうした実存主義に関心を持っておりましたので、宗教的な面は別として、思想内容の面でも重なり合うところが多かったので、よく長時間議論したり、いろんな刺激を受けたわけです。

こうした先生の傾向というのは、その後広い流れから言えば変わりないわけで、そういうスピリチュアリズム系統の流れに即して、あるいはマルセルに、あるいはティヤール・ド・シャルダンにと、研究対象を広げて行かれたと思うのです。

日本の学界ではフランス系統のものは、特に戦前はやってる人たちは余りおられず、まして戦後の混乱期の直後ですから、まだフランス思想を研

究してゐる方がいない大学が多かったと思うのですが、慶應の倫理学専攻といふのは、三雲先生が戦後最初のフランス留学生の一人であったということもあって、そちらの系統をやる人が、以後ずっと今日まで続いていると思うのです。

そうした専門の面に加えて人格的な影響も、三雲先生に直接習った人々に多かれ少なかれあったと思うのです。ご存じのように、かなり信念の強い、どちらかと言えば重厚な方でした。原典講読の授業の時からそれを強く感じたのですが、ずるいのが嫌いで、概して軽佻浮薄なことがお嫌いです。具体的な経験に即した意味での精神性といいますか、スピリチュアリテというものを重視される。そういう人柄というのは最近の世の中の風潮と馴染まないのですが、三雲先生に教わった私よりずっと若い人たちの中にも、こうした人格的な影響というのはかなりあるのではないかと思います。

私自身は 1960 年代の後半以降、三雲先生が常任理事、あるいは学部長、こうした学内の要職を歴任されるようになってから後は、個人的な接触というのは非常に薄くなつたのですが、その頃は樽井君や谷さんが接触が多かつたと思います。

**樽井** 学部の時は三雲先生の概論を聞き、大学院ではベルグソンの講読に出ました。しかしそれよりも、学部、大学院を通じて、研究室や飲み屋でお話を伺つた方が多かつたように思います。教員になってからは、学部長室というものはどうも行きにくいところになりましたが。

**谷** 私は大学院の時から教えていただくようになりました。けれども間もなく学部長になられてずっとご多忙になられたので、大学院ではフランス語の講読のみでした。講読が終わった後に大抵一言か二言、今日読んだところの感想を漏らされるわけなんですが、それが非常に簡潔であるだけに胸に染みるような場合が時々ございました。個人的な思い出ですが、授業に私が遅刻したことがございまして、その時は一対一だったので

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

ですが、私非常に恐縮しながら申し訳ありませんというふうにお詫びすると、いや自分も今来たばかりだからとおっしゃるんですけど、そんなことはないことはわかつておりまして、(笑) その時のなにか暖かさのようなものがいつまでも忘れられないでおります。

私自身はフランスのものというよりはロシアのほうばかり向いて、いつも勝手なことをやっておりましたにもかかわらず、遠くから見守っていてくださいました。ただ、ティヤール・ド・シャルダンのものを幾つか読んでいただいたことが、非常に勉強になったことは確かです。

**西村** 授業あまりおしゃべりにならないという点では、橋本先生と雰囲気が似ている気がしますが。

**池上** どこか風格も通じるところがありましたね。

**小泉** 一つ思い出したことがあるんです。大出(大江晁)さんと三雲さんとのことです。三雲さんの卒業の送別会の時です。松本先生が酔っ払って寝てしまった。私は遠くに離れていたせいもあって、どうして喧嘩になったのかわからぬんですが、大出さんと三雲さんが物凄い大きな声で喧嘩し始めた記憶があります。(笑) あの当時はなにか非常に殺伐とした雰囲気があったと思うのです。お二人共、私の印象では、陸軍航空兵から帰って来たというようなところがありました。非常に男性的で、喧嘩早くて、鋭角的にものを言うという、それで喧嘩したらしいのです。(笑) 仲がすごくいいんですよ、すごくいいから喧嘩するんですね、それでびっくりしたことを思い出しました。

それからこれは村井(実)さんから聞いた話ですが、村井さんや三雲さんや大出さんたちがお酒を飲んでたんですね。その席で喧嘩になっちゃって、そして村井さんと沢田さんのほっぺたを、三雲さんだったか大出さんだかひっぱたいて、大騒ぎになった事件があるんです。山本万二郎さんが「詫びなさい、詫びなさい」と言っておたおたしている。ところがぶたれた沢田(允茂)さんは「えらい」と言って褒めるんだって、この若い二人

をね。なんかあの時代というのは、幕末の志士みたいなところがみんなにあって、(笑) 腕っ節を使うというのは当たり前だったんですね。村井さんだって、自分の上司にそれだけの抵抗ができるというんで、喜んだらしいんだ。(笑) そこらも面白いでしょう、当時の雰囲気というのはそういうものでした。

西村 三雲先生のお人柄というのは、戦争の体験が非常に強いですね。

小泉 ものすごく強いてす。直接聞いたわけではないですが、自分の同期の人がほとんど死んでしまった、だから自分の与えられた命というものは、ほかの人の命の代替なんであって、だから今生きる時にそういう人たちのために社会奉仕しなきゃならんという、そういう気持ちを持っておられたんじゃないかなと、僕は推察するんです。

樽井 それに近いことは、よくおっしゃってました。

西村 前に『三色旗』にお書きになっていたのを読んだのですが、戦争から帰って来られて虚無感にとらわれて、一時はカルメル会の修道士に憧れておられたけれども、転じてティヤールのような一種のオプティミズムのほうに変わっていかれたということです。

池上 僕が接した時は、そうしたニヒリズムというか、カトリックの中でも実存主義的な傾向の強かった時期ですよね。

小泉 それから君がさっき言ったでしょう、マルキシズムと実存主義を総合しようとされたわけです。あれは助手の時代だろうと思うのですが、聖心女子大学の経済学の先生でカトリックの方を中心に、マルキシズムを、『資本論』を読もうという会合があって、三雲さんと太出さんが出席しておられたということです。それから、フランスから帰ってから、「労働司祭」という問題を非常によくお話をされた。ただそれは一つのモデルだったかもしれませんね。

池上 そうですね、それは第二次大戦直後のフランスのカトリシズムの中の一つの潮流ですね。

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

**小泉** 行動を見ていると、非常に労働司祭のイメージと重なってくると  
いうか、そんな気がしますね。

**樽井** 先程西村君が言ったように、三雲先生と橋本先生には、共通点があると思います。お二人とも要職にあって大変に潔癖な方だった。だから周りの人から一目置かれ、信望をよせられたのだと思うのです。ご自身が潔癖なだけに周囲に対して厳しいところもあったのですが、同時に同僚に対しても、学生に対しても、包み込むような優しさを持っていました。この点では倫理学の先生方はどなたも同じで、学生をとても大切にしておられます。私は学生のころ、よく小泉先生のお宅に伺って、本を読んでいたきました。今話を伺うと、宮崎先生も、三雲先生も、そういうことをなさってらした。そういう学生に対する姿勢を、私どもも受け継ぎたいと思います。

**小松** そうですね、学生に対等な人格として接してくださるんですね。それは当時非常に印象に残りました。それによっておのずと自分に対する責任感みたいなものを感じさせられました。このことは大切なことだと思います。

**西村** 小泉先生と池上先生には伺いましたが、小松先生が学生の頃は、学生の数はどれくらいでしたか。

**小松** 私の時は一学年三、四人ですね。

**樽井** 私の時は 60 年代の後半ですが、十人以上いました。でも十人超えたのは初めてだろうと思いますが。

**池上** そして 1971 年、72 年に例外的に三、四十人に達して。あとは 70 年代を通じて十人を超えていましたが、80 年代に入って減ってきて、十人ぐらいの時もありましたが、二人ということもありました。それでこれは何とかしなくてはというので、倫理学専攻は 1990 年度にカリキュラムの改訂を行ったということですね。

**西村** カリキュラムの改訂も含めて、これから倫理学専攻ということ

について、一言ずつお話をいただきたいのですが。

**樽井** 従来のカリキュラムは、概論と学史といったものを中心にして、西欧の倫理思想を学ぶことに重点が置かれていました。今度新しいカリキュラムにつくりかえたのはなぜかというと、そうした西欧の倫理思想における基本的な考え方が、現在私たちが直面している様々な倫理的な課題にとって、どういう意味を持つのかを自覺的に考えよう、つまり一方で原理的なものを学びながら、もう一方で現実の場面に即して考えよう、特に後者のほうを重視していこう、こういう意図が一つにはあるだろうと思うのです。

それは、学生が直面している問題について、それは倫理学の言葉を使って語るならば、どういう形で表現できるのか、という問題です。それを学生が、カリキュラムを通してつかみ取っていけるようにする、カリキュラムはそうしたものでなければいけないのではないか。

**小泉** 現実の問題としては、倫理の問題はいたるところで重要な課題を持っています。ですからそれに向かってアプローチするのは、今後も益々重要になってくるだろうと思いますね。若い学生諸君がそうした問題を発見しても、どう勉学したらいいのかというルートが明確でない。そのためのインフォメーションを、専攻のカリキュラムとして示すことが非常に重要なんだと思いますね。

**小松** 今の学生は自分たちの問題が倫理の問題だということに気づいていない。だからそういうことを気付かせる必要があるということでしょうね。しかし逆に言うと、伝統的な倫理学の問題というものが、もはや今日ではそういう生活のレベルで具体的に出てきているということもあります。その伝統的な倫理学の問題を、われわれは今日の日常的な生活レベル、あるいはそういうカテゴリーを用いてどう表現できるのかということが、今度はわれわれ自身の課題として出てくるんじゃないかと、そこで初めて接点が出てくるんじゃないかと思うのです。ですからこの度のカリキュラム

## 倫理学専攻のこれまでとこれから

の改訂ということも、そういう意味を持つてゐるのかなど、僕なりの解釈をしております。

西村 現代の課題を考えるということは、結局われわれの世界の将来に目を向けることだと思うのですが、その際にそういう目から、今までの倫理学的な伝統をどういうふうに見るかという問題が一つあると思うのですが。つまり、一方でそういう過去の思想的伝統というのを、受け継いでまた次の世代に伝えるという仕事も大学にはあると思うのです。古典というのは学生にとってだんだん遠い存在になっていくわけですが、もし古典が現在の問題を考えていく上で意味を持っていることがわかれれば、古典もまた色褪せることはないと思います。

谷 古典を学ぶということの意味は、益々これから大事になってくると思います。一つのテクノロジーの進歩が、地球全体の生命圏にどう影響を及ぼしていくかという現象面を確実に把握していく方向はもちろん大切ですが、同時にそうした現象を現しだしている根本はやはり人間であるわけで、その人間のものの見方というのは、たどって行けば源は古代にあるわけです。やはりその根の部分を知らないと現在の様々な学問が分化してしまった状況というのは、トータルに見ることができないのではないかと思います。ですからこうした現代の状況を見詰めるまなざしと共に、古代、中世、近世の総体を概観できるような方向が、うまく醸成されていけばいいのではないかと思います。

池上 カリキュラム改訂に関してですが、従来基本的には哲学的な倫理学に重点を置いていた。それが実際に日々起こっている現実問題を取り上げるようになった。それでは今まで授業をされてきた古典的な哲学的な科目との関係はどうなるのかということですが、私の思うに、人間には社会的な面と、個体として死んじゅうという実存的な面がある。死に方は時代によって変わってきたわけで、そこにどういうふうに死に行く人を看護するかというような社会的な問題も絡んでくる。死というのは一例に過ぎ

ないけれども、一番そういう人間が個体として持っている、ある意味で人間にとて永遠の問題と、それから社会的な問題、家族、あるいは医療技術云々ということを含めて社会的な問題との接点を見出していく場面が、新たなカリキュラムで設定されたというふうに思っています。

西村 どうもありがとうございました。

(この座談会は 1990 年 7 月 19 日に研究室で行われた。当日、大谷愛人先生は折あしく出席されなかつたが、先生は 1967 年から倫理学専攻の専任教員としてキルケゴールを中心に近代ヨーロッパ精神史を講じられ、90 年名誉教授になられた。)